

南方（その他）

熱帯戦場と食糧

鹿児島県 右田 弘

〔軍歴〕

私は、昭和十六年十月一日都城西部第十七部隊補充隊に入隊、昭和十八年八月一日臺北派遣第一四七連隊に転属、昭和十九年一月二十三日門司港出発、四十六師団静一九六四部隊に編成替えとなる。

同年二月二十七日より蘭印小スンダ列島の警備につく。

昭和二十年一月二十日マレイ半島警備、ジョホール地域警備、昭和二十年九月二日終戦となる。

同年十月十一日レンバン島に抑留される。

昭和二十一年六月四日、大竹港に上陸復員となる。

その間、マレイ半島にて共産ゲリラ討伐に参加して引きつづき警備にあたる。私の軍歴は加算を含めて十年と九か月余となるが、内地補充隊に二年ほど勤務して外地勤務となったが、終戦後にレバノン島に抑留されて約十か月くらいはいた。レバノン島はインドネシアに属する無人島であり、当時、シンガポール、マレイ半島に存在の日本軍及び軍属、民間人、約十万人が英国軍の嚴重な警備のもとレバノン島に送りこまれた。

ガラム島を含むレバノン島はゴム林が少しあるだけの不毛のあれ地で、上陸当時は道路建設の作業隊に参加させられたが、食糧が不足のために、くる日もくる日も開墾をして食糧になるタビオカの植えつけに苦勞をした。

食糧自給のための作業である。

いつの日に帰るのか、また復員できるか、前途は闇のなかで食糧不足のため栄養状態は悪化するばかり、日に日に食糧はなくなるが、作業は一層きびしくなってきた。部隊兵士の大半は青ぶくれの蒼白となり、栄養失調で身体全体がむくんで作業にたえることが出来ずに毎日床に伏す者が多くなり、ただ死を待つばかりになって、連日の食事も、重湯ばかりで自然と体力が衰えるばかりである。

どうにか仕事に出るものたちも足もとがさだまらずふらふらとして、なんとかその日を過ごすだけである。

ただ思うことは温かい米の飯が腹一杯食べたいことである。日が落ちて夜になって、星や月が出た夜空を眺めて思うことは内地のことばかりである。人間といえど窮すると、人間的なことを忘れて動物的になり餓鬼道におちいり、食糧の分どり合戦が起こるようになる。

動く力もなく座して死を待つものばかりであって、三度の食事も一時的にただ餓をしのぐにすぎなかった。二十歳代の若者が昼間床に伏して、小便ですとに出るにも

杖がなくては歩けない状態であり、そのうえ、南方ぼけはひどく、意欲はなくなるし動くに動けず、まるで、生きた幽霊のようであった。兵隊の一日のカロリーの摂取量はいくらなのかさだかではないが、三度の食事は米粒が少しみえるくらいで、食事後はすぐに強制的な重労働でその務は言語に絶するものであった。

レバノン島は赤道下の熱帯地で、インドネシア領に属する小島であるが、全島がジャングルにおおわれて、道という道は大半は坂道で平坦な道は少なく、歩くのにも非常な苦勞がかさなるので、その苦勞はひととわりではない。

作業は丘の密林を切り開く作業で、衰弱した身体でそれは本当に命がけであった。ジャングルのなかの植物は食糧になる物が少なく、草原のワラビも雨の後で少し出るくらいでほとんど出ない。食糧になるような木の葉もほとんどなく、十万人もの人間がきそって若葉を取りに出るひまもない。取った木は野菜のかわりに湯がいて塩漬けにして食べるほかはなかった。

西にスマトラの山があって、印度洋の熱風を受けて乾

季の熱さにマラリヤや、熱帯病にむしばまれて、戦友たちが、つぎつぎと倒れる者が続出して、ただ死を待つばかりであった。

この島に送られた者は、英軍がふたたびシンガポールに上陸するためにシンガポール及びマレイ地域にいた日本軍人・軍属・民間人約十万人が島流しにあつてこの島にきたのである。この地域には特殊の風土病があつて、その病気にかかるほとんどが助からない。病名は黒水病であり病気にかかると明日のいのちも保障が来ないといわれていた。

毎日のように何人かの戦友が点呼をすまして急に黒い小便をしてすぐ病院に送られて、明日の朝は死んでしまうという恐ろしい病気である。一番こわいのは朝と、夕方にする小便であった。そのはずである、その小便によつて生死のわかれめとなるのである。

また、苦しいのはそればかりではなく排便である。毎日の食事が重湯ばかりで栄養になるものはなく、五日も六日も過ぎて便所に出るものはなく、長い時間かかんでいても、でるものがでないので倒れてしまうような苦し

みである。そのはずである食べた木の葉の繊維が水分のない腸のなかでかたまつてしまい、力のない身体で青筋を立てていきんでみてもひとつも出ない。最後になつて出るものは、黒く堅く丸い、まるで兔の便のようなものが大きくなつてしまつて肛門からでられないので、便所に行くときは手に竹ベラを持つてあてがつて出す始末である。

このような食糧事情のため栄養失調になり、部隊の約二割ぐらいの戦友が、終戦後になつて死んでいったのである。

その後になつて英軍の食糧が補給されたので、隊員は体力を回復することが出来た。

ミンダナオ島の攻防戦

島根県 田中堅一
島根県 勝部孝吉

昭和十六年十二月、現役兵として朝鮮第四三部隊入隊